

会員の広場



「一九六五年・ニューヨーク、二〇一七年・NEW YORK NOW」①

夏目 敏夫（東京）

五十三年前、JFK空港に着いた。当時はハワイ経由シスコ迄、後は、国内便でNYへ向かった。心ときめく旅だった。今回は八年ぶり、NY行である。降り立つと期待通り、変わらぬ逞しい息吹きを感じた。ポイント・ゼロは、荒廃そのものだった。それが今や光り輝く新WTTタワーを中心に、磨かれた石の遭難碑をサーク

ルと大噴水のある公園になった。近くの旧チエス銀行も綺麗に修復され、六月の陽射しを楽しむ人々で賑わっている。一九六五年九月から一年、この地での日々を回想し、また今を知る事が、今回の旅の目的である。限られた日程の中で可能か、それは、良きネイティブと日系人ガイドを得て成功した。

先ずは、カikatのロックフェラー邸を訪ね、今春、亡くなった、D・ロックフェラーJr.を弔問する。広大な庭園にある記念館で来歴を話す中に芸芸員の要請で往時の資料を寄贈する事になった。それは故人の推薦、加えてフルブライト基金、親銀行の支援で研修過程に乗れたからだ。外貨管理下一日15ドルの滞在費に厳しかったが役職行員マイルパスの支給で、余裕が出て各地を旅行することが出来た事に感謝した。終わって市内に戻るのと表面的に大きく変

貌している街々も、一歩横丁に入ると、オー・ヘンリーの短編集の世界が今も残っている。1930年代の風景である。止宿していた西百三丁目にあった優雅なザ・マスターは新しいビルに変わり、古きものの消え行く淋しさを感じた。金ビカのトランプ・タワーに行く。嵐の後のように至って平穏そのもの、街角に武装警官も目立たない。私服とカメラでカパーしているらしい。

日系ガイドのT氏とはバス、地下鉄で、美・博物館を巡る。特にメトロポリタンと彼は専属契約があり、色々な特権で、かつてない程、充分な観賞が出来た。彼の撮った名画の前の私は、素晴らしい構図の写真になった。館内食堂で、セントラル・パークを眺めながらランチ、ワインを飲み、藝術論の花を咲かせる。彼は、京都藝大出身、西陣の絵師でもあり、在米三十年の

経歴、来年二月東京で個展を開く由、再会が楽しみだ。MOA、グーゲンハイムは何度かの入館だが常に新鮮味がある。次の日は日系ガイドのM氏、RVで数名の同行者と、マンハッタンを観光する。私自身、屢々訪れた所でもある定番コースだ、しかし手馴れた良い説明が印象的だ。かつての私の3年余の仕事場―ウォール街。NY連銀の地下金庫にあった眩しい金塊の山を思い出した。

映画「SATC（セックス・アンド・ザ・シティ）」のロケ地を横目に、初めてリバイティ島に上陸、自由の女神を見上げた。多民族の人で溢れていた。人々のアメリカへの憧れはここから始まる。最近、女神像の登頂はNET申し込みで一年待ちと聞いた。エリス島に寄る。白人系の人達が降りた。ここは移民達にとって第一の関門、そのルーツ捜しに旧移民局ビルを訪れるのだ。